FateでIS

武器屋の店員A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＦａｔｅでＩＳ

【Ｎコード】

Ｎ５０７４Ｚ

【作者名】

武器屋の店員Ａ

【あらすじ】

基本的に物凄くやる気の無い…というか、人としてどこか壊れてる主人公が、死ぬ→能力ゲット→転生という流れで、Ｆａｔｅに登場する能力をぶら下げてＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の世界へ行く話。

※只今ＩＳの原作及び漫画版を攻略中です。

0（前書き）

描写？へったくそですけど？
文章力？１０年前に捨てましたけど？

0

ｓｉｄｅ：？？？

すぐ近くから悲鳴が聞こえる。

誰の？

分からない。

ぼんやりと空を見上げる。

見上げる？

いや、俺は前を向いているはず。

ああ、仰向けになっているのか。

軽く息を吸う。

肺の中をガスの臭いが満たした。

近くに車でもあるのか？

視線を横にずらす。

眼に入るのは、鮮烈な赤。

なんだこれ。

ああ、俺の血か。

きったねぇなぁ……。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ：神

さーて、困った。

目の前で煌々と燃え上がり、もはやダークマターと化した書類を見て、何度目か分からない溜め息をつく。

「ハァ……どーしよっかなー……」

……ん？　あ、どーもみなさんこんにちは。え？　ボクですか？

ボクは神です。っていうか上に書いてあるじゃないですか。神って。それくらい知っておいてくださいよ。

……え？　知ってる？　あっそ。

っていうかちょっと聞いてくださいよ。実はボク、今ひじょーに困ってるんです。

ついさっき書類が燃えたんですけどね、その書類っていうのが『１人の人間の人生』が記された書類なんですよ。それが燃えるってい

う事は、即ち『死』を意味するんですけど、まぁつまるところ、とある人間がさっき死んだんですよ。……え？　それの何が問題なのかって？

いや、ただ死んだだけならいいんですよ。問題なのは、その人間の寿命が70年近く残ってることなんですよねー。

「ほんっと、なんで死んだんだよ……」

この時、ボクは目の前の処理に気を取られたせいで、あることに気が付かなかった。

実は書類は2枚重なっている状態で、燃えたのも当然2枚だったということに。

……うるさいな！　神様だって全能じゃないんだよ！

side out

0（後書き）

黒髪っていいよね。

1（前書き）

ただ助けを待つだけなのか？ただ流されるだけなのか？
じゃあお前は一体何のために生まれてきたんだ？何をして生きた証を刻むんだ？
何かを為す自信が無いのか？何もしないまま終わるのか？分からないまま、答えられないまま終わるのか？
ただ待ってるだけじゃ始まらない。ただヒーローを待つだけじゃ何も変わらない。今を変える方法は１つ。
他の誰でも無い、お前がヒーローになるんだ。

――――アンパンマン

1

何も無い、ただ限りなく白が広がる空間。

そこに立つ1人の少年と1人の子供。

少年の方は学生服に身を包み、その眼はどこか虚ろで、見ていると吸い込まれそうになる。きっと変わらない吸引力を誇るに違いない。

対して子どもの方は、『ＮＩＫＥ』と書かれたジャージを着ている。無論、上下セットだ。ちなみにオレンジ色である。

以下、子どもをＮＩＫＥ、少年をダイソンとする。

ＮＩＫＥがダイソンを上から下までじっくりと眺め、口を開いた。

「えーっと、山田幸助（ヤマダ コウスケ）くんだよね？」

山田幸助と呼ばれた学生服の少年――ダイソンは、ＮＩＫＥの問いに対し、まったくの無表情で返す。

「はい」

……二人の間に生温い沈黙が流れる。

先にギブアップしたのはＮＩＫＥだった。

「あ、あのさ、やけに反応薄いね」

「ええ、まぁ」

……再び沈黙が支配する。

「えーっと、ＴＰＰって何の略か知ってるかな？」

「ちん〇っぽ」

……。

「あー、そのー、とりあえず現状を伝えるけどね？　ボクは神様で、キミはもう死んじゃったんだよ」

「そうですか」

自身の正体と、相手の状態を明かしたにもかかわらず、それでも一向に表情を崩さず、平淡な声色で返し続けるダイソンに、ＮＩＫＥはどこか恐怖にも似たものを感じていた。

（なにこの人間。正直気持ち悪いんだけど。っていうかここまで会話のキャッチボールが成り立たないなんて……）

しかし、このままというわけにもいかない。

ＮＩＫＥは気を取り直し、再び言葉を投げかける。

「た、確かにキミは死んだんだけどね？　人間には押し並べて『天寿』っていうものがあるんだ。でもキミの場合、その天寿を全うする前に死んじゃったんだよね」

しかし、

「へぇー」

ダイソンはＮＩＫＥからのボールを全力で地面に叩き付ける。フォークなどというレベルではない。キャッチボール？　何それ？　的な状態どころではない。

引きっつった表情を浮かべながらも、ＮＩＫＥは必死に食い下がる。

「キミが死んだ年齢は１６歳。でもキミの本来の寿命は８８歳。つまり、キミには最低でもあと７２年は生きてもらわないといけないんだ」

「……なんでですか？」

！！

ここにきてようやくダイソンが反応を示した。思わず感嘆符を使うくらいびっくりである。

ＮＩＫＥは密かに達成感に浸りながら、ダイソンの放った問いにたいして返答する。

「いや、なんでって言われても……。ルールだからとしか言いようがないなぁ」

「誰がどのような理由の下で定めたのかも分からないようなルールに従えと言うのか？」

突如として早口で饒舌にまくしたてるダイソン。一体どうしたというのだ。

「えっ、いや、だかｒ「ふん、馬鹿馬鹿しい。結局神といえど、他人が勝手に作ったわけのわからないルール１つままならんとはな。そうやって自分が何のために何をしているのかも分からないまま朽ちていくがいいさ」

さらに口を高速で回転させるダイソン。傍から見れば、高校生が小学生をいじめているようにしか見えない。

「大体、俺は死んだのならそれはそれで構わん。さっさと地獄なり地獄なり、どこへでも連れて行け」

なぜ行き先が地獄一択なのだろうか。というか登場から１話も経っていないにもかかわらず、早速キャラ崩壊を起こしている。

ＮＩＫＥはダイソンの剣幕に、若干涙目になりながらも声を張り上げる。

「だから！　そういうわけにはいかないんだよ！　キミは最低７２年は生きなくちゃいけないの！　その後は好きにしていいからさぁ！」

「黙れ。面倒だ」

「生きるのがめんどうってどういうこと！？　っていうかキミの死因からして意味不明だよ！　なんなんだよ！『気が付いたら車道にいて、気が付いたら車にはねられる』って！　そんな投げやりな死因初めて聞いたよ！」

「そうか。奇遇だな。俺もだ」

「うがぁぁぁっ！　なにコイツ本当にめんどくさい！　ねぇもう頼むから早く転生してよ！　転生後の世界もステータスも決めさせてあげるからさぁ！」

「おーこーとわーりしますー。おーこーとわーりします断固」

「そんな微妙にマニアックな曲よく知ってるね！　正直『だが断る！』って来ると思ってたよ！　っていうか断らないでよ！」

「おーこーとーわーりーしーまーすー。ご遠慮しますー」

その後もひと悶着あり、なんとかダイソンの説得に成功するＮＩＫＥ。

ちなみにこの間、ずっとダイソンは無表情を崩すことは無かった。

さて、気を取り直して

「……それで？　キミはどんな能力が欲しいの？」

ＮＩＫＥは顔面の筋肉全てで疲労を表現しながら訊ねる。

対するダイソンは相も変わらず無表情だ。

「あ？　あぁ、別になくてもいいかなー」

「いや、キミは何の能力も無い状態で行ったら『つまらん。飽きた。死のう』とか言って自殺しそうじゃん。一応ボクからも妨害はするけどさ、それじゃあ意味が無いんだよね」

なんと鋭い洞察力であろうか。さすがは神。

ＮＩＫＥの言葉に、ダイソンは何やら思案するように顎に手を当て、

「……そうだなー……じゃあさ、Ｆａｔｅのバーサーカーとアーチャーのスペックが欲しい」

「スペック？　まぁ良く分からないけど分かったよ」

「あ、ちなみに４次と５次両方で頼む。一回やってみたかったんだよねー。ゲートオブバビロン、みたいな……ってちょっと待った」

ダイソンはＮＩＫＥにそう言うと、１人思考に陥った。

（４次と５次って言ったけど本当に両方いるのか？剣製が出来ればバビロンいらなくね？役割かぶってね？いやでも待てよそもそもバビロンは発動者の保有する財によって威力は変わるわけだから俺が使っても意味が無いのかいやそうとは限らないスペックの中に財が入っていれば十分運用可能だむしろ剣製の方が心配だな剣製はアー

チャーの知識と記憶があればこそ可能なのであって俺なんかが技術だけ持ってても仕方が無いしつまりギル様の財があれば万事解決か？……うーん）

わずか1秒程で思考を切り上げ、ＮＩＫＥに向き直るダイソン。なるほど、確かに気持ち悪い。

「とりあえず、さっき言ったスペックの中にエミヤの持つ知識とギルガメッシュの財、この両方を含めてくれ」

「？？？　あー、うん。了解」

ＮＩＫＥは頷きつつも、実際にはよく理解していなかった。子どもには早かったようだ。

「えっと、それじゃあ転生する世界は、そのＦａｔｅ？の世界でいいの？」

しかし、そこで肯かないのがダイソンである。

「いや、アニメとか漫画の世界に行けるっていうなら、ＩＳの世界に行きたい」

「……アイエス？」

「インフィニット・ストラトスだよバカ」

1（後書き）

筋肉筋肉〜

2（前書き）

私は知っている。世の儚さを。
私は知っている。限りなき苦しみを。
私は知っている。”力”の行く末を。
私は知っている。私の人気を。

――モッピー

2

「おい！　パスしろよ！」

ボールが規則的に跳ねる音と、室内シューズと床の摩擦音が耳に鬱陶しくまとわりつく。

「おい、デュエルしろよ！」

「うっせー蟹！」

あぁ、本当に五月蠅い。

”私”は伏せていた顔を徐ろに上げた。

眼前に広がるのは、運動部が調子に乗る暑苦しい光景。

今は体育の時間。種目はバスケ。場所は某中学校の体育館。本来なら別々の場所でスポーツに興じるはずのこの時間。しかし今日は珍しい事に、男女の場所が偶然重なったのだ。

ちなみに私は隅っこで体育座りをしている。

何故か。答えは簡単。仮病を使って見学にしたのだ。

具体的には、

「安西先生、バスケとかだるいです」

「じゃあ八神さんは見学だね」

といったやりとりが先程なされた。

と言っても、別に本当にバスケがダルかったわけでは……うん。やっぱりダルかったわ。

ってそうじゃなくて、体育を見学しているのにはそれなりの理由がある。

その理由とは、即ち私のチート能力である。

私が参加すると、それは最早スポーツではなく、一方的な蹂躙となるのだ。

故に、私は見学に徹している。

ピッ！

甲高い笛が鳴り、コートに入っていたクラスメート達と、脇に待機していたクラスメート達が入れ替わる。

私はそれをぼんやりと眺めながら、特に何も考えていなかった。

すると不意に、私の前に人の気配が現れた。

「ユウはまた見学？」

そう言って私に声をかけてきたのは、クラスメートA。

名前は……なんだっけ？

「う～ん、参加したいんだけど……。ほら、私が参加したらさ……」

「まぁ確かに、ユウが入ったチームは絶対に負けなくなるもんね」

私の身体能力についてはクラスの誰もが知ることである。なので、今となっては体育不参加の私を咎める者は一部の例外を除いて殆どいない。

そう。一部を除いては。

「ちょっとユウ！　サボってないで入りなさい！」

再び私を呼ぶ声がする。地平線の彼方から、ビックバンの彼方から、私を呼んでる声がする。

あー、めんどくさい。

「いや、でm「でももデモクラシーも無い！　いいからそっちのチームに入って！」

私が断ろうと声を上げるも、それを遮る甲高い声が体育館に木霊する。

その声の主とは……

「凰(ファン)さんも懲りないねぇ」

誰かが呟いたがその通り。一部の例外にして声の主とは凰鈴音(ファン リンイン)その人である。

こげ茶髪、ツインテール、黄色いリボン、低身長、ちっぱい。

このくらい特徴を挙げれば十分だろう。

彼女には何故か毎度の如く目の敵にされている。

いや、目の敵というより、ことあるごとに突っかかってくるのだ。

私が何をした。

「……はぁ。仕方が無い」

私は嘆息し、犬歯をむき出して威嚇しているお姫様のもとへとだらだらと歩を進m「なにしてるのよ！　早く来なさい！」駆け足で向かった。

さて、遅くなったが、物語の開始を告げよう。

この物語は、かつては山田幸助（♂）、今は八神　優（♀）である私が、主人公、織斑一夏を殴っ血ＫＩＬＬ物語である。

2（後書き）

あー、ホント分かりにくいなー。

主人公の紹介　～本当はこんな章、作りたくなかったよ～（前書き）

主人公の紹介です。かなりのクズなので、読者に嫌われること間違いなし。

主人公の紹介　～本当はこんな章、作りたくなかったよ～

名前：八神優（ヤガミ ユウ）

性別：女

年齢：現時点で１３才（リン、一夏と同じ学校）

容姿：
腰まで伸びた黒髪に、同色の虹彩。
身長は一夏よりも若干低い程度。
スタイルはそれなりに良く、何がとは言わないが、大きめである。
神から押し切られる形で貰った能力を使用すると、虹彩が赤色に染まる。
最初は「厨二っぽい！　かっけー！」と、テンションが立ち上がりーヨだったが、２回目に気付いた時はすでに冷めていたのか、特に何のリアクションも示さなかった。

性格：
天の邪鬼。それでいて面倒くさがり。
綺麗な言い方をするならば、『あまり出しゃばらず、どちらかと言うと控えめ。能力の関係上、自分が何かをすると既に結果が決まってしまう（例えば体育では無双してしまう）ので、極力何もしないようにしている。しかしそんな中にもしっかりと芯を持っており、他人や周囲に流されるのを嫌う』といったところ。
一応外面はいいようで、キャラもがっつり作りこんでいる。
本人は愛想笑いとポーカーフェイスに絶対の自信を持っており、曰く、それが対人関係において最大の潤滑剤であるとのこと。

好き：音楽鑑賞（Ｖ系と電波ソング）
嫌い：虫、他人、自分、鈍感主人公、努力、人の多い場所、流行

能力：
エミヤ、我様、巨人、甲冑の能力を持つ。
具体的には
・投影魔術
・無限の剣製
・王の財宝
・武芸百般をこなすセンスと身体能力
・アーサー王をも凌ぐ剣術
・拾った武器でも宝具クラスで扱える能力
ｅｔｃ．．．

しかし、渡すべき能力の取捨選択が出来なかった神のせいで、本来はあまり必要の無い余計なものまで付いてきている。
・赤い弓兵の家事、主人公スキル（朴念仁的なアレも含む）
・黒いデカブツの履かないスキル（基本的に家では履いてない）
・金ぴかＡＵＯの慢心スキル（慢心せずして何が王か！）
・基本的に自分を責め、他人に許されると不安になる（何故罰さないのですか！）
・単独行動＝協調性の無さ（何者にも縛られない俺、マジカッコイイ）
ｅｔｃ．．．

その他：
自殺が出来ない。事故死もしない。最低７２年間生きることが既に決まっている。

こんなもんかな？　あとから追加するかもしれないです。

主人公の紹介　～本当はこんな章、作りたくなかったよ～（後書き）

Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.

私は剣の骨です。

3（前書き）

何と言われたって、それがどうしたと。
誇れるものがあるなら、どんなもんだと。
前を向いて、僕は僕なんだと、胸を張り続けるんだ。
そうしていれば、君は1人だって大丈夫。
僕が居なくても、君は未来へ歩いて行ける。

――――ドラえもん（旧）

3

時は遡り、入学式

まだ少し肌寒いこの季節。風に舞う桜の花びらを視線で追いながら、新たな学び舎となる場所へと足を踏み入れる。

俺が私となって、１２年が過ぎた。

最初こそあの糞餓鬼（自称神）を再起不能に追い込んでやろうと思っていたが、今となっては八神優である事にすっかり慣れていた。

と言っても、自分が女であることや、八神優という者の存在を肯定するつもりは毛頭ない。

『慣れた』というのは、『八神優というキャラクターを演じる事』に慣れたという話だ。

がらんどうな俺を覆うハリボテ、それが私。そう割り切ることで、私はまだ俺でいられる。

「あっ、ユウ！　おはよう！」

校門を過ぎた所で、誰かが手を振りながらこちらに近づいてくる。誰だあいつ。確か小学校の頃にも見たことがあるような気がしなくもない。相手の態度から察するに、自分と彼女は知り合いなのだろう。

「うん。おはよう」

顔の筋肉を動かし、柔らかい微笑みを形作る。ラグもムラも作るな。無理にでも自然な笑みを作れ。

今の私は八神優だ。

「もうクラス表って見たの？」

彼女……仮にAとする。Aは私の顔を覗き込むようにして訊ねてくる。ちょ、顔近い。邪魔。

「ううん、まだ見てないよ。そういえばクラス表ってどこにあるの？」

完璧な切り返しだ。さすが私。

そしてこの後の流れも容易に想像できる。というかそういう展開に持っていくための私のセリフなのだから。

ずばりその展開とは、これから一緒に見に行く。或いは張り出されている場所まで案内してもらえるに違いない「それがアタシも分からないんだよね～」

なんだと？

「ユウなら知ってると思ったんだけど……うーん、どうしよう？」

Aはへらへらと軽く笑いながら頭を掻く。……ふぅ、少し落ちつけ。私は今、八神優だ。ならば完璧であれ。

内心でAに役立たずの烙印を全力で叩きつけ、先程と変わらぬ完璧な笑みを浮かべる。

そして私はこの状況を打開すべく、ある提案を掲げた。その打開策とは……

「じゃあさ、あそこにいる人に聞いてみようよ」

そう。他力本願である。何か文句でもあるか？

余談だが、他力本願とは本来、仏教用語で『阿弥陀如来の本願力による浄土往生』を指す。平たく言えば、『自力で極楽に行けるなど思い上がりも甚だしいわ！』ということである。つまり、他人に頼りきり、主体性が欠如している状態を指すのは厳密には誤りである。

さらに余談だが、この『余談だが――』という解説文は遼ちゃんがよく使うものである。遼ちゃんが誰か分からない人は、歴史好きな

お祖母ちゃんにでも聞いてみよう。

閑話休題

私が指をさした先――そこには1人の男子生徒の背中がある。

その男子生徒は、どうやら入学案内のプリントを読んでいるようだ。きっとそこに校舎の見取り図的なものがあるに違いない。いや、あったらいいね。

分かりきっていることだが、私達2人はそのプリントを持ってきていない。私に関して言えば紙飛行機にして窓から飛ばした。ホントに何をしているんだ私は。ＡＵＯの慢心スキルでもうつったか？……いや、関係無いか。

私はＡを連れ、その男子生徒の元へと歩み寄った。

「あの、すいません。ちょっといいですか？」

少しどころか案内までさせるつもりだけどな。

私はそんな内心は一切外には出さず、男子生徒の返事を待った。

この時、私は何故この男子生徒に声を掛けてしまったのだろうか。

元男であることが原因で、無意識のうちに男の方が話しかけやすいと思ってしまったのかもしれない。もしくは、それこそ慢心していたのかもしれない。慢心と言うより、油断、平和ボケと言った方が

適切か。或いは忘却か。

私はこの時まですっかり、この世界が何なのかということを失念していたのだ。

いずれにせよ、私はこの選択を……ひいては、この先起こるであろう未来、そしてそれに自分が関わってしまうという事を激しく後悔するはめになる。

私の声に気付いたその男子生徒が、ゆっくりと振り返る。

「ん？　どうしたんだ？」

そう言ってニコリと厭味の無い笑顔を魅せる男子生徒。対照的に、私の笑顔は凍りつく。

忘れてた

やっちまった

Ｏｈ．．．

様々な言葉が脳内を飛び交う。だが待て八神優。フリーズしている場合じゃない。私は八神優なのだから、この程度で動じるわけにはいかない。

「実はクラス表がどこに貼り出されているのか分からなくて……」

脳から指示を出し、口を動かし、言葉を紡ぐ。それだけの動作がひどく困難に感じる。

「だったら一緒に行こうぜ？　俺もちょうど行くところだからさ」

「ホント！？　ありがとー！」

隣にいるAが、やたらと高いテンションで了承する。そりゃあ、運よくイケメンが引っ掛かったんだから、テンションも上がるか。

私は2人と共に、校舎の中へ入っていく。

これが私と、この世界の主人公――織斑一夏とのファーストコンタクトである。

3（後書き）

あったまてっかてーか
さえーてぴっかぴーか
そーれがどうした
ぼくドラえもん

4（前書き）

てめぇはずっと待ってたんだろ！？　不幸でみじめな道化で終わらないで済む、ジャイ子を嫁に取らなくて済む……そんな誰もが笑って、誰もがホンワカパッパするハッピーエンドってやつを。

お前だってしずかの方がいいだろ！？　ジャイ子なんかで満足してんじゃねえ、命を懸けてしずかの風呂を見てぇんじゃないのかよ！？　だったら、それは全然終わってねぇ、始まってすらいねぇ

ポケットを漁れば叶うんだ！　いい加減に始めようぜ、のび太！！

――――ドラえもん（新）

4

「あっ、そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は織斑……織斑一夏っていうんだ。お前は？」

隣を歩く黒髪の少年の問いに、今までどおりの笑顔を浮かべて応答する。

「八神優です。これからよろしくね？　織斑くん」

少年――織斑一夏も同様に笑みを浮かべる。それも、私の様な紛い物ではなく、本物の綺麗な笑顔だ。

「ああ、こちらこそよろしく」

彼の笑顔に中てられたのか、視界の脇で頬を赤らめる女子生徒がちらほらと見える。驚くべきことに、その中には男子生徒も交じっていた。アッー！

さーて、どうしてこうなった。

今私はこの男と2人で廊下を歩いている。というのも、先程クラスを確認したところ、Aだけが別のクラスで、私とコイツが同じクラスだったのだ。この時Aが何やら文句を垂れていたが、なんだかんだと言いつつもAは先に自分の教室に入り、こうして私と、隣の鈍感野郎が取り残されるという展開になったわけだが……

正直、この状況は私にとって好ましくない。

何故か。別に難しい話ではない。

１つ目に、私が本筋に関わると面倒そうだという事。イベントの内容が変わることで、予期しない死人が出ても不思議ではない。

それから、これがかなり重要なのだが、私は『主人公』という生物が嫌いだ。ヤツらを見ていると非常に腹が立つ。

強引なフラグ建築、謎のイケメン力発動、それに簡単に靡くヒロイン達、非常に腹が立つ。というか理解不能だ。自分が正常だなどと言うつもりはないが、ヤツらも相当に変（態）だと思う。だから、極力この男とは関わりたくなかったのだ。

『ＩＳをチート能力使って生身の状態でフルボッコにしてやんよｗｗｗ』

などと考えていた転生直前の自分をフルボッコにしてやりたい。何でこんな世界に転生したんだコンチクショウ。どうせならＴｏＨｅａｒｔ２とかマジ恋とか俺ツレとか朝色とか恋チョコの世界にすれば良かった。

「おっ、あそこじゃないか？」

そうこうしているうちに、目的の教室へと辿り着く。

私は先程クラス表を確認した時に目にした名前を思い出し、密かに溜め息をついた。

どうせ教室に入るとすぐそこにいるんだろうなぁ……。

そんな事など知った事ではないとでも言うように、隣にいるイケメソが何の躊躇いも無く扉を横に滑らs「遅い！　何してたのよ！」
あぁ、やっぱりね。

目の前で黄色いリボンで結われたツインテールが、その名の通り尻尾のように揺れている。意志の強そうな双眸は、ただ1人の少年へと向けられている。そう、隣にいる織斑一夏に吠えているこの女子生徒こそ、私が作中であまり好きになれないキャラクター――凰鈴音だ。

「わりぃわりぃ、実は時計の時間が少しズレててさ……」

そう言いながら手を合わせ、頭を下げる一夏。すると、鈴の後ろからひょっこりと別の男子生徒が顔を出した。

「まぁ、一夏もこう言ってるし、許してやれよ」

長めの赤毛に、黒いヘアバンド。確か名前は……あーだめだ。ド忘れした。

名前が分からないので仮に赤毛君としよう。赤毛君は、そういえば……と呟き、こちらに視線を向けた。

「そっちの女子は？　一夏の知り合いか？　ハッ！　もしやまた……」

「またって何だよ。ただ案内しただけだって。っと、そうだ八神、紹介するよ」

そう言って今度は一夏までもがこちらを向いた。というか先程から

ツインテチャイニーズがこちらを睨んでいるのですが。正直恐いのですが。

「こっちの赤毛が五反田弾、で、ツインテールの方が凰鈴音。２人とも小学校の頃から一緒なんだ」

紹介を受け、ゴタンダダンと呼ばれた男子生徒が「よろしく～」と軽い調子で告げる。

対して鈴の方は、まったく笑顔になっていない笑顔を張り付けている。目が笑ってないというか、口の端が不自然に釣り上がっているだけだ。引きつった歪な笑顔のまま、私に向けて口を開いた。

「よろしく。それで一夏？　この子とはどういう関係？」

「だからここまで一緒に来ただけだって！」

一夏の言葉に、鈴はそれでも尚カンストする程の猜疑心を孕んだ視線を寄こしてくる。赤毛も鈴程ではないが、私に何かを期待するような目を向けてくる。どうやら私も自己紹介をしなければならない流れの様だ。

というか視線が痛い。痛すぎる。っていうか胸に物凄く突き刺さってます。どこ見てるんですか鈴さん。

「えっと、さっきも織斑くんから名前が出たけど、一応自己紹介するね。私は――」

私は再び笑顔を作り、無難な挨拶の口上を垂れる。

とりあえず私に今学期の目標が出来た。

何とかして鈴の誤解を解く事だ。具体的には、織斑一夏に恋愛感情

を抱いていないことを告げる必要がある。

でも突然そんな事を言ったら逆に怪しくないか？　というか鈴の気持ちをどうして知ってるんだっていう話になるし、これはかなり言うタイミングが難しいな。

はぁ、めんどくさい……。

4（後書き）

この小説モドキに対して下手に期待を持つことはあまりお勧めしません。
何故なら、この小説モドキの作者は読者の期待を悪い意味で裏切るからです。

5（前書き）

A「（うわ…なにコイツ恐い）あ、あぁ！？　なんだテメェ！」
B「（ゲッ、見るからにヤンキーだ…）っや、やんのか？　あ？」
A「（なにコイツめっちゃやる気なんですけど。マジ怖いんですけど）テメェ俺はアレだしおめぇ。俺がアレだって知ってて言ってんのかテメェ」
B「（え？　何？　もしかして不良界では変な異名で呼ばれてるクチですか？　ヤベぇ俺オワタ）あ、あぁアレね。知ってるし。知ってて言ってるし。ていうか俺こそアレだし。えっ、何？　お前俺のこと知らねぇの？　それちょっとヤバいし」
A「（うわぁぁ！　有名人だったぁぁぁ！）は、は？　知ってるし、ちょー知ってるし。も、もう怒ったし。テメェ逃げるなら今のうちだぞ？　マジで俺キレたらヤバいから。病院送り確実だから（俺がな）」
B「（なんか怒ってるぅぅ！いやぁぁ！）は？　俺の方がキレたらヤベぇし。俺実は裏では漆黒の騎士って呼ばれてるし（厨二時代のコテハンだけどな）」
A「（何それこえぇぇぇ！　ってか超強そうじゃん！　マジで帰りたいんですけどぉぉ！）あ、あぁソレね。聞いたことあるけど大したことねぇし。俺も似たようなの持ってるし。むしろ俺の方がすすげーし。俺はフォカヌポゥ本田って呼ばれてるし。と、とにかくもう謝ってもおせぇから。マジぶっ殺すから。（もうこうなったら勢いに任せるしかない…！）うっほぉぉい！」バッ！
B「（何か構えたぁぁぁ！　いや死ぬ！　俺死ぬ！）そ、その構えなら知ってるし。あ、アレだろ？　ナントカ真拳的なアレだろ？ってかアレだし。俺の兄貴の方が上手いし。俺の兄貴それの全国大会で優勝してるし（俺は何を言っているんだ……）」
A「（全国大会あんの！？　てかこれって公式！？）は？　俺だっ

てしてるし。っていうか実はお前の兄貴の師匠俺だし。マジお前終わったよ（俺も終わる）」

唐突に飽きた。

5

「くじ引きの結果、クラス委員は織斑君と八神さんに決まりました〜！」

「……え？」

黒板を背に、担任の女教師が高らかに宣言する。直後、教室内の空気が弛緩していくのを感じた。

しかし対照的に、内心でダラダラと冷や汗をナイアガラもびっくりの勢いで流す生徒が１人。

無論、私である。

時は流れ、今はホームルームの時間だ。ちなみに入学式は電光石火の早さで終わった。というのも、用意された椅子に座り、校長先生とやらの演説が始まった途端、気付いたら終わっていたのだ。何を言っているのか分からないと思うが、恐らく誰かがキングクリムゾンを発動したのだろう。式典中にスタンド発動とは不敬極まりない。決して私が寝たわけではない。

まぁそれはさて置き、私は目の前で告げられた核爆弾級の現実に、密かに教師に向けて中指を立てた。ふぁっく。

今朝、入学式が始まる前に一夏を始めとした３人との邂逅は果たした。その際に五反田弾や凰鈴音とも挨拶を交わしたのだが、どうもチャイナ娘の方は、私がおりむーさんに好意を抱いていると誤解しているらしい。誠に遺憾である。

そこにきて私と織斑一夏がクラス委員に選出されたこの状況。これでは不本意な誤解が音速を超えて深まっていくだけである。というか先程から物凄く熱烈な視線を感じる。主に凰さんの方から。もはや罰ゲーム以外の何物でもない。
まったく、私は神に嫌われるような事をしたのだろうか。……あっ、してたわ。

――だがまぁ、気にしたところで仕方が無い。

「何かと縁があるみたいだな。八神、改めてよろしく」
隣に座る男子生徒――織斑一夏が、見る者を魅了するイケメンスマイルを私に向ける。

「うん、よろしく。織斑くん」

私も幾度となく張り付けてきた笑顔で対応する。ちなみにこの時、クラスの女子の頬が朱に染まったのは言うまでもないことだが、廊下の時と同様、なんと男子生徒にも同様の症状が見られた。
ＩＳの主人公が男をも虜にするとは知らなかったな。

私は彼と笑みを交わしながら、脳内で思考を切り替えていた。
突き付けられた避けようの無い未来を受け入れることにし、後悔するのではなく、これからいかにして原作の流れからこの身を遠ざければ良いのかということを考えるといった風に。

しかし、私の目論見がいかに甘かったのかを、私はこれからの生活で知ることになる。

それから数日が過ぎた。

クラス委員という関係上、どうしても一夏と関わる時間が大きくなっていく。

そうなると、他の2人――五反田弾と凰鈴音の両名とも共に過ごす時間が増えるのは自明だった。

原作の流れにあまり介入したくないという私の思惑とは、全力で正反対の方向へと事態は進展していく。

しかし同時に、この状況はチャンスでもあった。そう、鈴が私に抱いている誤解をそげぶするチャンスだ。

「あの、凰さん？　ちょっと話が……」

「な　に　？」

「……な、なんでもないです」

まぁ、そう簡単にいくわけがないですよねーははは……はぁ。

しかし事態の悪化は止まらない。

ある日、本当に何の因果か、私は偶々鈴と放課後の教室で出くわした。しかも2人きりだ。

今度こそ誤解を解くチャンス！　そう意気込み、私は口火を切った。

さぁ、貴様のその誤解を完膚なきまでに粉砕してくれよう。

「ねぇ、凰さん」

空は昼の顔を潜め、赤く染まっている。

「……なに？」

遥かな境界線に沈みかけ、黄昏へと迫る太陽に、凰鈴音はその不機嫌さの塊の様な顔を照らされながらこちらを向く。

私はいつも通りの笑顔を作り上げ、今日までずっと胸に秘めていた言葉を吐き出した。

「凰さんって織斑くんの事が好きなんでしょ？」

「なっ……！！！！！！」

安っぽい爆発音の様な音と共に、彼女の整った貌は夕陽よりもなお赤く染め上げられる。……はて、言葉を選び間違えたか？　まぁどうでもいいか、結果さえ出せれば。

私が二の句を告げようとするよりも早く、彼女はやや顔を俯かせ、何やらぶつぶつと呟き始めた。

「わざわざ確認を取ってきたってことは……やっぱりコイツも一夏の事を……」

……あ、あれ？　鈴音さん？

数秒の後、ツインテールに纏めた髪を揺らし、勢いよく顔を上げる。

「分かった。アンタがこれほど大胆不敵なヤツだとは意外だったけど、相手にとって不足は無いわ」

ん？　ん？　　ん？

何をどう曲解したのか。恐らく目の前の少女はかなり混乱しているのだろう。そうでなければ、今の言動に説明がつかない。そしてパニックを起こしているのは私も例外ではなかった。脳内で、どうしてこうなった　のＡＡがいくつも表示されている。

状況の進展に着いて行けず、目を白黒させる私に向かって、小柄な少女はスッと手を差し出した。

「あたしはアンタを対等なライバルとして認めるわ。というわけでよろしく。あたしの事は鈴（リン）って呼んで。あたしもアンタの事はユウって呼ぶから」

「え？　あっ、はい。よろしく？」

思わず手を取る私……って違う！

「それじゃ、アイツ相手じゃいろいろと苦労すると思うけど、お互いに正々堂々と頑張りましょ！」

「いや、あの」

「じゃあね～」

彼女に向かって伸ばした手は何も掴み取る事は無く、ただ静寂のみ

がそこにあった。

あぁ、ホント最悪。

そして今日結ばれた不可思議な同盟のせいで、私は翌日から彼女に名前で呼ばれるようになる。
彼女にそう呼ばれると言う事は、必然的に一夏氏の前でもそう呼ばれると言う事であり、気が付くと彼からも同じように呼ばれるようになっていた。（その呼び名は後にさらに広まり、最終的にクラスのヤツら全員からそう呼ばれることになる）
結局、離れていくつもりが、寧ろ距離が縮まり、誤解を解くつもりが、さらにその誤解を強固な物としてしまったのだ。やることなす事が力いっぱい裏目に出たのであった。

本当に、どうしてこうなった。

5（後書き）

展開が我ながら強引過ぎる。というか文字数の感覚を早く掴みたい。

6（前書き）

確かに世界を救った事はある。それも1度や2度じゃない。
英雄なんて言えば聞こえは良いかもしれないが、毎回誰かに助けられて、自分だけでは何も出来なくて、いつも己の無力感にぶつかっていた。
出来たことと言えば、ただ信じることだけだった。
自分はすごい、天才だ、人気者だ。ただひたすらに我武者羅に、そう信じてここまで来た。

――――野原しんのすけ

6

その少年は何もしなくても何でも出来た。
勉強なんてしなくてもテストでは常に満点を叩きだし、練習なんてしなくてもスポーツでは同世代の子供のレベルを遥かに超えていた。
少年の導きだす答えは常に正しかった。彼の両親も少年を褒め称えた。

お前は天才だ、と。

そんな少年が、周りから何も思われていない筈が無い。

そしてその少年が中学に上がる頃、事件は起きる。

事件と言っても大したものではない。ちょっとした子ども同士の喧嘩だ。
体育の時間、野球部のエースを確約されていたとある男子生徒が、件の少年に三振で打ち取られたと言うだけの話。
男子生徒は何の努力も無い、ルールすらロクに知らないようなド素人に敗北したという事実を認める事が出来ず、癇癪を起し、少年に暴力を振るった。

たったそれだけの事だった。
少なくともこの時、何でも出来た少年の眼にはその程度の事としか映っていなかった。
今にして思えば、その時から既に、少年の中で何かがズレていたのかもしれない。

その後、その男子生徒は野球から逃げるように退部した。暴力を振

るってしまった事に対するケジメでもあったが、何よりも、単純に自信を喪失したのだ。

野球の才能を認められていた彼は、その才と期待に恥じぬよう、誰よりも早く、誰よりも多く、誰よりも強固に、努力と研鑽という煉瓦を堆く積み重ねていた。

その塔はどこまでも高く、彼もまた、己の築き上げた物が他の者に負ける筈は無いと自負していた。

しかしその自信という名の煉瓦の塔は、突如として現れた1人の天才によって木端微塵に砕かれる。それもその天才は、経験だけならド素人に等しいのだから、精神的衝撃は殊更である。

これで自信を失うなと言う方が無理であろう。

野球を奪われた彼には何も残らなかった。

何をやっても身が入らない。何をしていてもあの少年の影がまとわりつく。

あの少年なら自分よりも上手く出来るのだろう、と。

それは野球にしても同じだった。

退部しても、彼は野球が好きだった。いや、彼には野球しかなかったのだ。しかし彼が野球をしようとする度、試合を観戦する度、あの少年に負けた時の記憶がフラッシュバックする。彼は野球そのものに恐怖を覚えていた。

自分にはもとより野球しかないのだ。にもかかわらず、素人にすら敗北した自分には何がある？　こんな自分がここにいていい理由があるのか？　存在している意義とは何だ？

思考と疑問が己の中で徐々に膨らんでいく。それらはただ蓄積され、

あっという間に器を満たした。器が満ちれば待っている未来はただ１つ。

彼は自らの命を絶った。

スポーツに全力を注いできた者が、何かしらの要因でスポーツが出来なくなり、それを苦にして自殺を図る。
どこぞの物語にでもありそうな筋書きだ。しかし、今回はそれとは違う。
そこには明確な”悪”があったのだ。

当然、彼の仲間はその天才を責め立てた。それに便乗し、普段からその天才に不満を抱いている者たちも非難の声を投げつけた。
その責められた少年自身は、胸に感じる確かな痛みに首を傾げつつも、何故自分が非難を浴びせられているのか分からなかった。
その少年にとって、勝利とは当たり前の事であり、自分に必然的に与えられるべきものだと信じて疑わなかったからだ。

やがてそれは教師の目にとまり、保護者を交えての懇談会へと発展する。
少年は担任教師と両親、そして例の男子生徒の両親、野球部の顧問を前にして、自身の正当性を主張した。

ただ自分はいつものようにやっただけだ、と。

天才と呼ばれた少年は自分に罪は無いと確信していた。しかし、直後に首を垂れたのは彼の両親だった。
少年はその姿に衝撃を受ける。少年の絶対の自信が崩れかけた瞬間だった。
教師からも、両親に同意するような旨の注意が投げつけられる。そ

れがさらに少年の心を削った。

なぜ？　　どうして？

何かに罅が入るような音を感じながら、少年は脳内を疑問符で埋め尽くす。
そして両親からの言葉が、やけにゆっくりと、少年の耳に届いた。

お前が悪い。

この時、少年の心は完全に壊れた。
それと同時に理解した。

自分が人を殺したという事実を。

信じていた両親から否定された。自分のせいで人を死なせた。

失敗や挫折を知らなかった少年にとって、その事実はあまりにも重く、容易く押しつぶされる。成功だけを歩み続けた少年は、人生で初の、あまりにも大きすぎる挫折に直面した。
それから彼の両親や担任は、彼に努力の大切さを説いていたが、彼は呆然としたまま動かない。既に壊れた心に、外からの言葉など届くはずが無かったのだ。

散らばった破片を１つ１つ拾いながら、少年は全く機能しない頭で考える。

自分が悪いのか。
自分が今まで得てきた勝利は悪いものだったのか。
では自分は何をするべきなのか。

……いや、何もするべきではないのか。

組み直された破片は、元よりもさらに歪に仕上がった。中身の無い、空虚なガラス細工。

それ以来、”何でも出来た少年”は、その少年によって殺され、彼の中から完全に消え去った。

残ったのは”何も出来ない少年”……否、”何もしない少年”だった。

他人の勝利を奪わないように、もう誰も傷つけないように、もう自分が傷つかないように、

少年は自己の意志を殺し、常に手を抜き、自分の外との関わりを避けた。何かをするのが怖くなったからだ。

また自分に目を向けることもしなくなった。何かをするだけで、そこにいるだけで他人を傷つける害悪。そんな自分がひどく汚らわしく思えたからだ。

少年はいつしか、何も見なくなった。その双眸は淀み、どこまでも黒く沈んだ。

次第に少年は枯れていく。何もしなくなった生物が死へ向かうのは自然の摂理。ただ動くだけの肉塊。それは生きているとは言い難い。

この頃には既に、自分の内と外の両面への認識がかなり希薄になっていた。

朝のニュース番組も、学校での授業も、出会った人間の顔や名前も、その全てが少年の空っぽな心を通り過ぎていく。

他人と触れ合う時は、別の人間を幻想し、己を覆い隠した。

今話しているのは自分ではない。別の誰かだ。自分が関われば傷つけてしまう。だからその人間になりきれ。自分はすでに死んだのだ

から。

他人に関わることに臆病になった彼は、そうすることでしか他人との関わりを保てなかった。それが、自分と外、そして内。この３つの乖離を加速させていたのだが、彼は気付かない。

しかしそんな少年の心にも、辛うじて引っかかるものがあった。それはゲームやアニメといったものだ。内側にも外側にも向けられることの無かった少年の視線はそれらに注がれた。

アニメやゲームなら、傷つけることも傷つけられることも無い。何かを奪う事も無い。

少年はそれらに触れる時間だけが至福だった。他人もいない、自分もいない、己に仇なす物は何一つとして無かったその世界は、少年にはひどく眩しく、それでいて暖かく映った。

しかし、かつて死んだ”何でも出来た少年”は、そんな少年が嫌いだった。

§

「Ｃｈｕっ！Ｃｈｕっ！　キスしてあげる　愛してあｇ」

けたたましく鳴り響くケータイのアラームを止める。そのまま半身を起し、ベッドから足を下ろす。立ち上がり、部屋の外へ出た。

廊下を歩き、階段を下りる。

「あら、もう起きたの？　おはよう、優」

「おはよう」

挨拶をされた。応答した。この人は……そう、八神優の母親だ。

自分は誰だ？

俺は山田幸助だ。

自分をこの世界に確立させるためのハリボテ。自分は俺の意志でこの世界に転生した。

では俺は誰だ？

私は八神優だ。

借り物のこの姿に与えられた役割はこの人の娘、そして俺の入れ物。

俺が今演じるべきキャラクター。

今日はクラス委員の仕事があるからいつもより早く起きている。

「朝ごはん、もう少しで出来るからちょっと待っててね？」

私の母――八神楓（ヤガミ カエデ）が、包丁片手に笑みを浮かべる……って、この表現だけだとかなり恐いな。

「うん。あっ、私お父さん起こしてくるね」

そう言って、私はいつもと同じ手順でいつもと同じ笑顔を作る。

よし、今日も大丈夫だ。

人気の少ない廊下。
隣を歩く男子生徒が、私の腕に支えられているプリントの束に目を向ける。

「なぁユウ、やっぱそっちも俺が持つよ」

そう言う彼の腕にも既にプリントの束が抱えられている。

「ううん大丈夫。ありがとね、織斑くん」

やんわりと断る私。このやり取りはこれで４度目である。いい加減ウザいぞ織斑一夏。

今は朝。それも、他の生徒がまだ登校して来ていないような時間帯だ。
普段の喧騒に溢れたものとはまた違った姿の校舎に、まるで世界に２人しかいないような錯覚を覚える。

ちなみに今何をしているのかというと、今日のＳＨＲ時に配布するプリントを教室まで運んでいる。ただ、そのプリントの量がはっきり言って異常だった。
２人で分割してもまだ両手で抱えなければならないのだ。これを異常と呼ばず何と呼ぶ。

「あっ、そうだ」

突如、一夏は何かを思い出したように呟いた。そしてすぐに、やや俯きがちに逡巡するような素振りを見せる。

「どうかしたの？」

訊ねながら、私は下から見上げるように彼の顔を覗き込む。私の顔が突然近くに現れたからか、一夏は「うおわっ！」などと奇声を上げながら仰け反った。心なしか顔が若干赤くなっていた気がしたが、今はそんな事を気にしている場合ではない。何故なら、

バサァッ！

「あっ……」

「うわ……」

先程の衝撃で、一夏の手にあった紙束が広範囲に渡って床を白く塗りつぶしたのだから。

さらに偶然、2人の生徒が通りかかった。彼らは話に夢中で床の惨状に気付いていない。

「でさー、昨日もレイカちゃんからメールが来てさー」

「だからそれサクラだって」

2人は会話しながら紙の上を通り……

クシャ、ズルッ

ごんっ！

「いやちgモルスァッ！？」

「いや絶対さkおぱんつ！？」

鈍い音と共に白き大地と邂逅を果たし、奇声を上げてその慶びを表現する2人の男子生徒。
要するに紙を踏んで滑って転んだのだ。

「「……」」

私達はどちらも言葉を発さずに、目の前の現実から逃れる術を模索していた。

「……拾うの手伝うよ」

「……すまん、ユウ」

結局コイツがあの時に何を言おうとしていたのか聞くことが出来ないまま、この静かで短かった時間は過ぎて行った。

6（後書き）

まだ原作本編には追いつきません。
そして伏線の設置も終わりません。
そもそも大した伏線がありません。
種明かしなんてまだまだ先です。

そんなことよりサッカーしようぜ！

7（前書き）

お前も早く得物を出しな。
どちらが捕食者なのか、その身に直接教えてやろう。
さぁ、　や　ら　な　い　か

――――阿部高和

7

「朝から立て続けで悪いんだけど、放課後に資料の整理を手伝ってくれる？」

「はい。分かりました」

その日の放課後

カビと埃の臭いが鼻をつく。
陽光は遮られ、薄暗さが輪郭を曖昧にし、より一層不気味さを増している。

「あっ、この資料はそこにしまってくれ」

「うん。分かった」

手渡された資料を指定された場所へ持っていく。
というわけで、今私達がいるのは資料室。私達というのは、私と一夏という意味だ。
朝から続き、またもや雑用という名の……うん。雑用は雑用か。
とにかく雑用を押し付けられているのだ。クラス委員というのも大変である。特に彼に関してはバイトを休んでまで手伝ってくれている。優しすぎるというのも難点だという事を改めて知った。

私は作業を続けながら考える。
暇だ。退屈だ。暇すぎて死ぬ。……あ、そうだ。

たまには女子らしく恋愛話をするのもいいかもしれない。

「ねぇ織斑くん」

「なんだ？」

互いに作業の手を休めることなく会話を続ける。

「織斑くんってさ、好きな人とかいないの？」

「うーん、よく聞かれるけどいないな」

静かな部屋に、２人分の声と、プラスチックのファイルとプリント用紙が擦れる音だけが響く。

「ホントに？　織斑くんって結構モテるでしょ？」

「いやいや、そうでもないぜ？　俺なんて全然だよ」

ついでだ。お前のその鈍さも多少は矯正してやろう。そうすれば鈴も少しはやり易くなるだろう。
ちなみに鈴は未だに私の事をライバル認定している。しかし彼女と

接するうちに、私の中での彼女の高感度は急上昇していた。
ええ子やで、あの子は。

「いやいや、そう思ってるのは織斑くんだけだよ」

「ん？　どういう事だ？」

「ほら、織斑くんってカッコイイし優しいし、気も利くし家事も出来るし、それでモテないっていう方がおかしいよ。気が付いてないだけで、織斑くんの事が好きな人は案外身近にいるんじゃない？」

「えっ……？」

ふと見てみると、彼は作業の手を止め、こちらを凝視していた。
暗がりで分かりづらいが、顔も赤くなっている……ような気がする。

そういえば一夏がここまでストレートに褒められた事って無いんじゃね？
あらあら、うっかりうっかり。うふふ。

その後、物凄く気まずくなったのは言うまでも無い。

「織斑くん、これは上の方じゃない？」

資料は基本的にファイリングされており、そのファイルの背表紙には番号と簡易的な名前が書いてある。
棚を見ていると、１つだけ前後の数字と合わないものがあったのだ。

私はそのファイルを手に取り、一夏に手渡した。自分でやるのが面倒だったからだ。何か文句でも？

「ホントだな。ちょっと待っててくれ」

受け取った彼は肯き、奥の方へと移動する。
ややあって戻って来た彼が持っていたのは、少し大きめの脚立だった。
彼は私の目の前でその脚立を使い、棚の上部へ資料を戻す為に腕を高く伸ばし、踵を軽く浮かせた。

さて、ここでいくつか確認しておこう。

まず１つ目に、

「下の方を支えてくれるか？」
「オウヨ！」

というお決まりの流れがスルーされたこと。

次に、彼は今腕を高く伸ばしており、その手には分厚いファイルを持っている。しかもつま先立ち。何が言いたいのかというと、かなり不安定な体勢であること。

さらに、今は部屋が暗いので周囲の確認が困難であること。

最後に、私の目の前でそれらが展開されているということ。

「痛っ！」

上方から金属と人体がぶつかる鈍い音と、朝から何度も聞いている声が耳を貫く。
直後、脚立とその上の人間の身体が左右に揺れる。
重みの無い金属音、次いで紙がめくれる音。同時に迫り来るクラスメイトと数冊の分厚いファイル。

うわ、マジｋ

ｓｉｄｅ：一夏

「いってぇ～……」

頭上に陣取るファイルをどかし、立ち上がろうと床に手を着いた……はずなのだが、

（何だこの床……柔らかい……）

そう、柔らかいのだ。しかも弾力がある。そしてちょうどいい感じの大きさ。軽くひと揉みしてみる。……うむ。柔らかい。
マシュマロ？　綿？　もち？　いや、どれも違う。
一体何なのかと、暗い手元をよく見てみると、それは制服の胸部だった。

ははは。なんだ胸かー。そうか胸かー。ははは。

「…ッ！？」

突如として突きつけられた目の前の現実に、声にならない声を上げる。

それは歓喜の声か、はたまたマンガなどでありがちなパターンを予期しての悲鳴か。どちらかは定かではない。

ゆっくりと視線をスライドさせる。するとそこには……

「えーっと、そろそろどいてもらってもいいかな？」

我がクラスメイトにして同じクラス委員のユウ様が非常にお困りになっていらっしゃったのだ。

「うわぁっ！　すすすすまん！　って違うんだユウ！　これはその何というかだな……」

勢いよく立ちあがり、しどろもどろになりながら弁解にならない弁解を繰り返す俺に、「あはは……。大丈夫、気にしてないから」と、余裕の笑顔で応対するユウ。

気にしないって……。それはそれでどうなんだ。いや、暴れられるよりはマシだけど。っていうか鈴なら絶対に暴れてるだろうなぁ。

俺は脳裏に浮かんだ、幼馴染が酢豚片手に暴れまわるという奇特すぎる光景を掻き消し、改めて謝罪の言葉を告げた。

「その……悪かった」

「だから別にいいって」

ユウはそう言うが、なかなかその顔を直視出来ない。
正直かなり気まずい。いや、俺が一方的にそう思ってるだけなんだけどな。

俺のそんな雰囲気を察したのか、ユウも何と言葉を掛けるべきか考えあぐねいているようだ。
数秒後、この空気の中、口火を切ったのはユウだった。

「そういえば織斑くん、今朝何か言いかけてたよね？　あの時なんて言おうとしてたの？」

……よりによって今それをチョイスしますかユウさんよ。
恐らく彼女が言っているのは、俺が紙を床にばら撒く直前の事だと思う。
俺としては今ここで言うのはかなり憚られたが、それよりもこの空気を何とかしたいという欲求が勝ってしまったのだろう。
気が付くと、自然と言葉が零れ落ちていた。

「いや、大したことじゃないんだけどさ、ユウって俺のこと避けてないか？」

「……えっ？」

声のした方を見てみる。そこには、ぽかんという擬音が出そうな程ぽかんとしたユウがいた。

「ごめん、避けてるって言うと語弊があるな。なんていうかこう、他人行儀っていうか、一線を引いてるって言うか、とにかくそんな

感じがするんだよな」

すぐ近くにいる彼女は黙ったまま俺の言葉に耳を傾けていた。

校門を抜けた先、校舎のすぐ前、彼女と初めて会った時から感じていた違和感。

彼女の言葉や態度は、それまで接してきたどの人間とも違っていた。警戒とも呼べるかもしれない。距離を縮めれば縮める程、彼女は遠ざかろうと抵抗している。しかし同時に、そこに留まろうとしているようにも感じた。チグハグというか何というか。俺にはそれが不思議でならなくて、気が付くと目で追っていた。

見れば見る程、知れば知る程、近づけば近づく程、彼女の立つ場所は、どの他人よりも遠かった。

その警戒とそれに対する抵抗のせめぎ合いが、俺に対しては一層顕著だったように思える。まぁ所詮は思えるってレベルだけどな。

それに、と俺は続け、先程口にした推測に至った最大の理由を放った。

「ユウってさ、鈴の事は下の名前で呼ぶくせに、俺や弾の事は苗字で読んでるだろ？」

「……は？」

ユウは再びぽかんとしていた。心なしか、驚きよりも呆れの方が大きいように感じた。

ややあって、今度は吹き出し、クスクスと笑い始めた。呆れたり笑ったり、忙しいヤツだな。

「なんで笑うんだよ」

「いや、なんて言うか、やっぱり織斑くんは織斑くんだなぁって」

「ほらそれだそれ！　なんか他人臭くてしっくりこないんだよなぁ～」

すると彼女はまたしてもあの顔を見せた。離ようとしながら留まろうとする。見せたといっても本当に一瞬だ。それも気のせいと言われれば納得してしまう程に些細な変化。

気が付くと、ユウはいつものユウだった。柔らかく微笑み、その桜色の唇を踊らせる。

「じゃあこれでどう？　一夏くん？」

この時、何故か俺の目は彼女に奪われ、その場から動くことが出来なかった。恐らくユウから見た俺の姿は、さぞだらしなかっただろう。

いつの間にか気まずかった雰囲気はどこかへと消え去り、その後滞り無く作業は終了した。

ちなみに今日家に帰ると偶然千冬姉が帰ってきていたので、今日あった事をそれとなく話すと（当然脚立から倒れた件は伏せた）、

「私の弟がこんなに鋭いわけがない。お前は誰だ？」

などと言って本気で戦々恐々していたのでむしろこっちがビビった。

さらに翌日、ユウが弾を下の名前で呼び、その事情を俺に訊ねた弾が千冬姉と同じような事を言っていた。

「俺の一夏がそんなに鋭いわけがない！　誰だお前！」

「俺はお前のじゃない」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一夏が基本的に人の心の機微には鋭いという設定を失念していたことにより、私が軽い失態を晒した揚句に名前で呼び合うような関係になってしまった事件から月日は流れ、今の季節は冬。

この頃には何とか鈴の誤解を解くことが出来た。ここまで至るのに、

「ごめん。実はあたし、小学校の時に既にプロポーズしてるのフェアじゃないわよね」

「大丈夫、私は別に一夏くんのことは何とも思ってないから」

といった経緯があったのだが、まぁここで語ってしまったし十分だろう。

と、そんな事よりも今はもっと重要なことがある。というか目の前に転がっている。

それは――

「……チケット？」

「うん、そう」

父が見れば発狂しそうな程きれいな笑顔で肯定する我が母。

「あいやぁぁっ！　まぶすぃぃぃっ！　母さんの笑顔が眩しすぎるぅぅぅ！　可愛いよ母さぁぁぁん！　目がぁぁっ目がァァァァァッ！」

陸に打ち上げられた魚の如くのたうちまわり、既に発狂している父。

「モンド・グロッソって知ってるわよね？」

母に訊ねられ、記憶を探る。……はて、何だったか。

普段からもっとテレビを見ておけばよかった。後で調べておくか。

「実はそれのチケットが手に入ったから、みんなで見に行こうと思って」

「ふぅん、それっていつなの？」

「来年に入ってからだったかしら」

結局この後、第二回モンド・グロッソの事をすっかり忘れたまま、その日はベッドにもぐりこんだ。

「悔しい！　でも感じちゃう！　ビクンビクン！」

お父さん……ビクンビクンって口で言わなくても……。

7（後書き）

突っ込まれるだろうなぁ～……と思っていたら以外にも指摘されなかった点。

・弾と一夏が出会うのは中学に入ってからでは？（ｗｉｋｉ参照）

・数馬きゅんはどうした（ °Д° ）ゴルァ！！

・”ヤ”ガミ（♀）と”オ”リムラ（♂）の座席が……隣？

ちなみに用意していた返答←

・一夏及び主人公との関係の形成が面倒という理由だけで一夏と出会うタイミングを中学入学以前にしてしまった五反田弾氏には非常に申し訳ない事をしたと思っており、ここに深く謝罪申し上げます。

・御手洗数馬氏については出さない予定です。だってどんな人物か分かんないんだもの。

カズマ繋がりで星空へ架かる橋の一馬で良ければ出しますけど。

・入学してすぐの座席は自由という設定です。ちなみに座席の位置関係はこんな感じ←

窓　優　夏

窓

窓　弾　鈴

鈴が一番に座り、その前方に一夏が陣取り、弾が何となしに鈴の隣

に腰をおろし、「今この流れで最も自然に座ることのできる席がどうのこうの」と、モタモタしていた我らが主人公である優さんが最後に残っていたその位置になったのです。

……多少無理があるのは承知の上です。

8（前書き）

とりあえず前章で言いたかったのは、一夏は優のことをよく見てますよという事です。

そんなことより皆聞いてくれ！　実は面白い……いや、やっぱ面白くないけどとにかく思った事があるんだ！

・一夏が鈍感なのってモップさんのせいじゃね？

幼少期からの付き合いで、その頃から箒に好意を向けられていた。しかし昔から素直になれなかった箒ちゃんは気持ちとは逆に一夏にキツく当たってしまう。そんな態度は明らかに好意から来るものではないと判断した一夏。しかも一夏は人の心の機微には鋭いという設定がある。つまり、箒が何かしらの感情を抱いているのは察することが出来たと。しかし行動から読み取れるそれは明らかに自分に対して良い物ではない。
つまり、そのせいで好意＝恋愛感情と言う風に繋がらなくなってもおかしくない。だから好意を向けられる程度では、相手が自分に対して恋愛感情を抱いているとは直結しない。

・実は鈍感なのは一夏じゃなくてヒロインなんじゃね？

常識的に考えて、付き合う＝買物になどと直結するはずが無いし、プロポーズ紛いの事をされて単純に奢ってもらえると解釈するはずが無い。挙句の果てにキスまでされて、これで好意に気が付かないはずがない。
つまり一夏はヒロイン達の好意に気付いている。ではあのスルースキルは何なのか。

簡単だ。無言の拒絶である。彼は優しいから、直接拒絶すればみんなが傷ついてしまうのではないかと思い、告白そのものを無かった事にしているのだ。
ヒロイン達は、自分がとっくに振られている事に気付かず、一夏への思いを抱き続けている。
一夏はお姉ちゃん一筋なんだよ。

っていうかモンド・グロッソってどの季節に何処で行われたんでしょうかね。
イタリア語だし、イタリアですかね。
いやでもドイツ軍が独自の情報網を敷けるような場所ですから、ドイツかもしれませんね。

8

「ヤガミユウ？　それがお前の探してたってヤツか？」

淡い橙色を基調とした、温かみのある色合いの部屋。どこかのホテルの一室のような場所で、ソファーに腰を下ろしている美女が粗野な口調で訊ねた。

訊ねられたのは、中学生程度と思わしき白髪の少年。彼はどこか煩わしそうにしながらも、視線を美女の方へと向けた。

「ああ、そうだ」

少年はそれだけ答えると、壁に寄りかかり、手に持っていた文庫本のページを開いた。頭を傾けると、さらさらと白い髪が垂れる。少年は気にも留めずに、視線をページの上で走らせる。

女性は再び彼に訊ねた。

「でも会った事も無いんだろ？」

「会った事は無くても分かるんだよ。見てくれが変わろうとも、この世界にいる限りはな。まぁ、向こうは俺の存在を認めようとはしないと思うけど」

女性は溜め息をつき、少年に見せ付けるかのようにげんなりした。

「なんだそりゃ。そんなヤツにわざわざお前が直々にモンド・グロッソの招待券を手配したのか？　……まさかソイツもお前みたいに”ＩＳをコアから作れる”ってわけじゃないよな？」

女性はソファーから身を乗り出し、少年に険しい顔を向ける。しかし少年はあっさりと首を横に振る。その表情には僅かな苛立ちが浮かんでいた。あまり、その人物の話をするのが好きではないらしい。

「いや、アイツは俺とは違う。違うって言うか、同じだけど違うって言うか、とにかくアイツはＩＳの製作に携わっていない。それどころか専用機すら無い。少なくとも現段階ではな」

ただ、と少年は再び少し苛立ち気味に続ける。

「製作に関してｃａｎかｃａｎ'ｔで言えば前者だな。俺に出来てアイツに出来ない道理はない。それに、生身での単純な戦闘ステータスなら俺とほぼ同等の筈だ。生まれ育った環境と、男と女という身体的な差があるから辛うじて俺に軍配が上がるってレベル。だから少なくともお前なんかが敵う相手じゃない。肝に銘じておけよ、オータム」

少年が女性に向けた眼は猛禽類を思わせる程に、強く鋭かった。

「アイツは俺が、真正面からぶつかって完膚なきまでに叩きつぶす」

§

二年生に進級したある日

朝、食卓をいつものように囲んでいると、母が唐突に切り出した。

「そういえば来週じゃなかった？」

来週？　何のことだ？

記憶を探るが、一向に答えが出る気配は無い。まぁ、人間の脳はどうでもいい記憶を排除するように出来ているのだから、恐らくどうでもいいことなのだろう。

「ああ、そういえば来週だな」

父も箸を進めながら肯く。え？　何？　知らないの私だけ？

「やっぱり今回のモンド・グロッソもブリュンヒルデは織斑千冬さんかしら」

母の言葉に、父は肯定の意を示す。

「前回はすごかったからなぁ。彼女なら二連覇も夢じゃないだろう」

（ふーん。そんなにすごい人がいるのか）

連覇というくらいだから、恐らく大会か何かの話だろう。

（まぁ、来週になれば分かるさ）

私はそう結論付け、みそ汁の入ったお椀を口元へ運び、盛大に噴き出した。

鼻と口から薄茶色の液体を垂れ流し、涙目で咳をする私。

そしてさり気無くテーブルの上の料理を避難させている両親。

お前ら、１０代の娘が晒した惨状に対するフォローと気遣いは無いのか。そんなんだからウザイとかって言われるんだ。私は言わないけど。

「もう、ユウったら慌て過ぎよ」

「そうだぞ。母さんの作った料理が天上天下並ぶ物が無い程の至高の品であることは認めるが、食事は良く噛んでゆっくり食べないと」

うぜぇ。ちげぇよクソが。

「けほっ、けほっ、え、えっと、モンド・グロッソってもしかして、ＩＳの世界大会？」

父と母はきょとんとした顔になったかと思うと、すぐにその表情を怪訝なものへと変化させる。

「ユウ、あなた大丈夫なの？」

「逆に聞くけど、それ以外に何があるんだ？」

大〇伸一だろ。

「えっ？　ユウも観戦に行くのか？」

隣に座る黒髪の少年――織斑一夏が、次の授業で使う教科書を鞄から引っ張り出しながら驚いたような声を上げる。

「”も”ってことは、もしかして一夏くんも行くの？」

私は返答の内容は分かっていたが、とりあえず聞き返した。

ブリュンヒルデの名は公式で発表されているので、別に知っているという体で返しても良かったが、『あいえす～？　なにそれ～？興味な～い』的なスタンスで居た方が、今後自然な流れで本編から離れていけるとふんだのだ。当然そのスタンスのままＩＳ学園を受験せず、普通の高校に通いながら裏でＩＳをボッコボコにしていくことになるだろう。

「あぁ、千冬姉が出るんだよ」

「千冬さんが！？　そうなの！？」

さも、今初めて知りましたとでも言うかのように少しオーバーにリアクションする。

「そうなの、って……ユウ、アンタ本っ当に流行とか世間の流れに疎いわね」

呆れながら斜め後ろから口を挟んできたのは、最近私の中での高感度が上昇している茶髪ツインテールチャイニーズ、凰鈴音だ。

「千冬さんといえば第一回モンド・グロッソでの総合優勝者じゃない」

「へぇ～、千冬さんってすごいんだね～」

ちなみに私は千冬とは一度だけ面識がある。面識と言っても、弾、鈴の2人と共に一夏の家に行った時に、ちょうど家を出ようとしていた千冬と偶然出会っただけという話だ。

「そうだ！　良かったら当日は一緒に行かないか？」

一夏からの提案に一瞬思考を巡らせるが、別に構わないと判断し、承諾した。

「なぁ、次って移動教室だろ？　早く行こうぜ」

赤毛の男子生徒――五反田弾に促され、席を立つ。

私はこの時失念していた。先程の様な軽い判断は、得てして後悔の種になるのだという事を。

というわけで、時は流れ一週間後

次の章に行く前に言っておくッ！　私は今、やつのスタンドをほんのちょっぴりだが体験した。

い…いや…体験したというよりは、まったく理解を超えていたのだが……

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！

「私は一夏と共に会場へ移動していたと思ったら、突如として一夏が攫われた」

な…何を言っているのかわからねーと思うが、私も何をされたのか、わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

8（後書き）

早く主人公にチート能力使わせたい。

9（前書き）

愚鈍な大衆は変化を嫌うのね

――――はなこちゃん

9

その光景はまさしく”異様”と形容するに相応しかった。
地面に横たわる、夜空と比して尚黒い髪を持つ少女の胸に、穢れを知らぬ雪の如く白い髪を持つ少年の腕が突き刺さっている。
これを異様と呼ばずして何と呼ぼうか。

少女は自身の胸から生える白い腕を、虚ろな瞳で他人事のように眺めていた。
肉が擦れる音と共に、真紅に染まった腕が引き抜かれる。
赤く滴るソレを気にも留めずに、少年は横たわる少女に背を向けて歩き出した。

「オータム、そろそろ織斑千冬のお出ましだ。ずらかるぞ」

ふわりとした髪の女性――オータムは、少年に対し露骨に不機嫌さを撒き散らす。

「チッ、仕方ねぇ。だがエイト、撤退するのはいいが、お前に1つ聞きたい事がある」

エイトと呼ばれた白髪の少年もまた、煩わしさを露骨に浮かべる。

「何だ？」

「なんでソイツにＩＳを与えたんだ？」

対する少年は、ふん、と鼻を鳴らし、胸の傷が塞がり始めている少

女に視線を向ける。
「別に。ただソイツが予想外に脆かったからな。そのスッカスカな入れ物を少しでも他の物で埋め合わせてやろうと思ったんだよ」
それに、と少年は続ける。
「ソイツには俺と同じステージに立って貰う。立てないなら無理やり引きずり上げる。そうじゃないと意味が無い。言っただろ？　俺の目的は『そこにいる女を真正面から叩き潰す事』だって」
オータムは理解できないとでも言いたげに、黙ったままＩＳを展開する。
彼女の専用機――第二世代型のＩＳ、アラクネだ。
「ちょっと待て」
ここで彼女に制止を掛ける者が居た。
件の白髪の少年である。
「なんだよ、エイト」
「俺も運んでくれ。ほら、俺がさっきまで使ってたのはアイツにあげちゃったし」
「知るか。って止めろ！　汚ぇ手で触んじゃねぇ！」
「知らないのかオータム。最近は手を赤く染めるのがトレンドなんだぞ？」

「そんな血生臭い流行なんざ知りたくねぇよ！」

§

「……え？」

私は呆然と呟く。否、あまりの早業に、そうすることしか出来なかったのだ。

つい数分前、もうすぐ千冬の試合が始まるのだということを一夏が嬉しそうに語り、私もとりあえず、楽しみにしている的な感じを醸し出していた。

この時、両親は一足先に会場へと向かい、私は一夏と2人で歩いていた。

だが、それは突然現れた。

すぐ近くに黒塗りの車が止まったかと思うと、運転手ともう1人を車に残し、黒服の男女が数名現れ、隣にいた一夏をひょいと左右から持ち上げ、車へ放りこみ、エンジン音と共に車は去っていった。

この間僅か10秒程。神速と表現しても遜色ない彼らの仕事ぶりに、思わず放心する私。

そして先程の呟きに至る。

さて、これからどうするべきか。

私は今後の展開を思い出そうと、頼りない記憶を探る。

……確か、今回の誘拐事件は最終的に千冬姉に助けられるんじゃなかったか？
それが原因で千冬はドイツに行き、ラウラが千冬に惚れて、一夏の夫になる、と。

うん。大体こんな感じだったはず。

ならば私が八神優として取るべき行動は決まっている。
私は携帯電話を取り出した。友人が攫われた場合の行動としては至極自然なものだろう

「……あっ、もしもし！？　実は今誘拐事件が――」

決して助けに行くなどという愚行は犯さない。だって行ったら千冬さんにいろいろとバレるじゃん？

そもそも私が行かずとも一夏は助かる運命にある。故に、私が行く必要はどこにもない。

それどころか、私が関わることが原因で一夏に死なれては困る。逆に私が関わっていないところで死ぬのなら大いに結構だけどな。

ただ、私は内心で一夏を軽く見捨てながら、胸中に言いようの無い何かを感じていた。いや、何かはハッキリしている。どす黒い、嫌悪の感情だ。

その感情は、先程一夏が攫われた時に最後まで車にいた白髪の少年。彼を見てからずっと胸に居座っていた。見た瞬間に分かった。コイツとは相容れないのだと。視界に入るだけで、ただそこにいると分かるだけで吐き気がする。

それだけではない。何故か、その少年に引っ張られているような気がするのだ。いや、どちらかと言うと”惹き合う”といった方が適切かもしれない。そしてその少年に対する嫌悪感が、少年を消せと、己を後押しする。だが同時に、近づきたくない、触れたくない、視たくないとも思う。要はその存在を認めたくないのだろう。

さらに、この感情は八神優のものではないという事が、余計に私……いや、俺の関心を惹いていた。八神優のものではない物など、この身には殆ど存在しない。あるとすれば、転生直前に作ったキャラクター（俺）が抱いた軽すぎる目的と、人の身には余る能力だけだ。

ならば一体この感情はどこから来ているのか。

信じ難いが、可能性として最も高いのは、本来の自分が抱いたものではないかということ。

”本来の自分”などと、まるで他人事のように分析しているが、俺

にはこの表現が最もしっくりくるのだから仕方が無い。
気が付くと、足が動いていた。無論、私の意志ではないし、俺の意思でもない。いや、そもそもそこに意志などという物があるのかも怪しい。
ただ見えない何かに惹かれ、導かれるままに進み続けた。

辿り着いたのは廃工場だった。
特に人影は見当たらないが、ここに先程の白い糞野郎が居る。何故かそう確信していた。
工場に向かって一歩踏み出した、その時

「待ちやがれ、そこのガキ」

その声は工場の屋根の上からだった。
視線を上へと向けると、そこにいたのは、背部にある８つの脚が蜘蛛を彷彿とさせる見知らぬＩＳ。

近くでＩＳの世界大会を開催しているというのに、こんなところでＩＳ操縦者が何をしているのか。
そこの廃工場に近づいただけで呼びとめられた所を見ると、どうやらこの先に近付けたくない何かがあるらしい。
タイミングや状況から考えて、恐らく先程の一夏誘拐事件と関係しているのだろう。だとするとここに一夏が居るのだろうか？　今思えば、一夏が監禁されていた場所も廃工場だった気がする。

と、ここまで考えて、次に今見上げているＩＳについて考察する。

あんなＩＳあったっけ？

9（後書き）

「私の彼女いない歴は５３万です」

「みんなー！　コイツに出会いを分けてくれぇー！」

１０（前書き）

ご都合主義って知ってるか？

――――黒髪ツンツンの彼

10

風が吹き抜ける。役目を終えた工場は、今ここに新たな役割を与えられようとしていた。

その役割の名は戦場。

屋根の上からあからさまな敵意を私に向ける1人の女性。その女性が纏うのは、背部にある8本の脚が特徴的なＩＳ。その脚は爪の様に鋭利で、黄と黒というミツバチのような配色をしている。ぶーんぶんしゃかぶｂ

私の信頼度０の記憶が正しければ、あの様なＩＳはアニメには登場していなかった筈。もしやアレこそが、私が介入したことによって変動した展開、イレギュラーなのだろうか。
もしそうならば、今回の一夏の誘拐は私のせいということになる。
なんてこったい。

「てめぇ、こんな所に1人で何の用だ？」

静寂に包まれたこの場所では、余計に耳に響く彼女の声。その声色には隠しきれない殺意が滲んでいる。

うーん、何の用って言われても『気付いたらここにいましたてへぺろ』なんて言ったら殺されそうだな。しかしそれが最も適切なのも事実だ。
でもまぁ、きっとあの白髪野郎に惹き付けられて来たんだろうから、一応人探しってことになるのか？

「人探し……ですか？」

「私が知るか！　要はあのガキを助けに来たんだろ？」

いや違う。

「だったら始末する。もし違っても変わらねぇけどなぁ！」

ＩＳを纏うふわりとした髪の女性は、その手にマシンガンを構築。間を置かずに引き金を引く。
火薬が弾ける様な音。それと共に吐き出される鉛の塊。大気を唸らせながら迫るソレが、私の身体を――――

「ッ！」

――――貫こうとした所で、手元から甲高い金属音が響く。見ると、私の両手には白と黒の双剣が握られており、右腕を斜めに振り抜く形で制止していた。

それは殆ど反射だった。
本来ならば、私の身体は弾丸に打ち抜かれ、地に伏していたに違いない。
今こうして立っていられるのは、偏に私……ではなく、彼の英傑達が培ってきた勘と技術のおかげだろう。

「てめぇ、それは……！」

驚愕と共に、あの女性の視線はたった今投影した双剣――干将莫邪に注がれている。

遅れて、自身の両目に違和感を覚える。恐らく能力の使用によって変色しているのだろう。何故虹彩の色が変わるのかは私にも分からない。拒絶反応か何かか？

そんな私の疑問などどうでもいいとでも言うように、女性は何やら文句の様な独り言をシャウトする。

「エイトの野郎と同じ……そうか、てめぇがヤガミ……。チッ、敵わないってのはそういうことかよ！　ふざけやがって！」

うるせぇ近所迷惑だろうが。……あっ、他に人はいないのか。

「私がてめぇに勝てねぇだと！？　そんなの認められるか！」

女性は跳躍し、空中で腰部装甲から2本のカタールを抜く。そして背部の8本の脚。その先端が割れるように開き、内部から現れた全銃口がこちらへと向く。

私はそれを見つめながら考える。

アレが私のせいでここにいるのであれば、早々に退場していただこう。そして私の知る流れに戻す。

ついでだ。あのＩＳには”俺”のターゲット第1号になってもらおう。記念すべき事だぞ、誇れ。それにどうせアニメには居なかったイレギュラーだし、ここで消えても何ら問題は無いはずだ。むしろ

消すことが俺の使命だろう。きっとそうだそうに違いない。

ｓｉｄｅ：オータム

アラクネの背部――８つの銃口から、ヤツの命を刈り取る鉛が打ち出される。
だがこれで仕留められるとは思わない。私は両手に握るカタールの感触を確かめるように握りしめた。

直後、鋼と鉛が激突する。アラクネから放たれた銃弾を、瞬時に展開した剣群が防いだのだ。

「クソッ！　やっぱりか！」

やはり、アレは私が見知った男と同じ能力だった。
私はその事に対する疑問と、黙っていたあの男に対する怒りとを押し殺し、落下を利用してカタールを振り下ろす。

しかしその先にヤツは居なかった。カタールはコンクリートを砕き、その空振りは私に僅かな隙を作る。
視界の端でヤツの口角が釣り上がるのが見えた。

しまっ――――！

「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」

ヤツの背後の空間が揺らぎ、そこから数多もの武具が放たれる。
煌びやかな物から無骨な物まで、宝物から名剣まで、ありとあらゆる物が射出される。かつて一度目にした、王の宝物庫。
一瞬目を奪われるが、背部の脚全てを活用して武具の嵐をかいくぐり、その際に3本程の脚を犠牲にしながらもなんとか射程圏外まで移動する。

が、それも束の間。直後には既に、黒く浸食された石斧を片手に持つヤツの姿が眼前に迫っていた。

「クソッ！」

悪態を吐きながら咄嗟に手元のカタールで応戦する。

いや、しようとした。

大気を切り裂く轟音と共に振られたソレは、私のカタールを軽く吹き飛ばした。それだけに留まらず、その振るった衝撃だけで私の両手は折れ、ＩＳの装甲には亀裂が入る。

「ああっ、ぐぁっ！」

腕に走る激痛に呻く間も無く、腹部にヤツの蹴りが炸裂する。
ボールの様に軽く飛ばされ、工場の壁に大きな亀裂を入れてようや

く停止した私に、またもや追い打ちをかけんとヤツが迫る。

「くらえ！　なんちゃって九頭竜閃…もとい、ナインライ――」

ヤツの必殺の技が届く直前、

「そこまでだ。八神優」

私の目に映ったのは、どこかより飛来した剣群。
それらは粉塵と破壊音を撒き散らしながら、私とヤツを隔てるように突き刺さった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

１０（後書き）

ああ。整合性をとるのはいいが――――

別に、ご都合主義展開にしてしまっても構わんのだろう？

――――白髪ツンツンの彼

11（前書き）

「吾輩の辞書に不可能と言う文字は無い」

「誤植か？　不良品なら返品しろよ」

「吾輩は辞書を持たない。故に不可能と言う文字は無い」

「じゃあ可能も無いわけだ」

11

「可哀想になぁ」

「誰だ？」

「そう睨むなよ。オレはまぁ、いわゆる神ってやつだ」

「神？」

「そうそう。つっても、オレはどっちかっていうと邪神の類だけどな」

「その邪神サマが何の用だ」

「だから睨むなって。別に大した用じゃねぇよ。非して同一なる道を歩みながら、片や神の恩恵に与り、片や気付かれずに輪廻の輪に組み込まれることも無く、永劫に彷徨い続けることになる。そんな後者であるお前さんを救ってやろうと思ってな」

「救う……だと？　俺を？　邪神であるお前が？」

「邪神だって同情くらいするさ。それで、何を望む？　お前さんはあと最低でも72年間は生きて貰う。具体的には、記憶と意識を持ったまま転生してもらうんだが、その上で特典を付けてやろうってわけよ」

「特典？　記憶の引き継ぎだけでも十分じゃないのか？」

「いや、それがな、どうもお前さんの片割れがその特典とやらを押し付けられたらしい。だからお前さんにもやらないとフェアじゃないだろ？」

「そうか、アイツも……分かった。じゃあアイツが望んだものを教えてくれ」

「確か、”ふぇいと”とかいうのに出てくる力。それから、転生先は”あいえす”とかっていう世界らしい」

「ではソイツと同じものを頼む」

「まるっきり同じでいいのか？　今ちょっと調べたんだけどよ、その世界のモビ〇スーツ的なのって女にしか使えねぇんだろ？　しかも能力の方はもっとヤバいだろ。転生してもお前さんは人間だ。その人間が英雄の力を使えばタダじゃあ済まねぇぞ？」

「それでも構わん」

「……ふーん、そうか。まぁ、お前さんがそう言うなら仕方が無い。その辺に関してはオレが勝手に調整しておいてやる」

「おい、余計な事をするな」

「人……じゃなかった。神の厚意は素直に受け取っとけ。誰かに気に入られるってのも1つの才能さ。だったら、それはお前さん自身の力に他ならない。オレはお前が気に入った。その迷いの無い意思の是非は知らんが、その先を見てみたくなったんだよ」

「……ふん」

「さぁ、行って来い。山田幸助」

「どうでもいいが、なぜＰＵＭＡのジャージをきｔ」

§

俺は目の前に突き刺さる大量の剣を放った人物に視線を投げかける。まず視界に入ったのは、雪のように白い髪。次いで、空とも海ともにつかない深い青の眼。

俺は自分と離れた位置に立つこの男に対し、出所不明の嫌悪感と同時に、大きな疑問と驚愕の念を抱いていた。

１つ目に、アイツは八神優という名を知っていた。

俺は転生後、特に何事も無く平穏に過ごしていたはずだ。こんな強敵オーラをビンビン放つような男に知られるようなことはしていない。

ストーカーか何かか？　気持ち悪い。

２つ目に、先程飛来した剣群。これらには法外な量の魔力が込められていた。

いや、量など問題ではない。この世界に存在しない筈の魔力。それ

をヤツは扱う事が出来るのだ。
しかも、先程の剣は、どれ１つとして本物ではなかった。全ては贋作、すなわち投影魔術。
何故魔術が使えるのかは分からない。しかし、ヤツもまた俺によって引き起こされたイレギュラーなのだろうということは想像に難くない。

「エイト！　てめぇどうして黙ってやがったんだ！」

ＩＳを装備した女性が叫ぶ。なるほど、あの糞野郎はエイトというのか。

エイトと呼ばれた少年は、先程自身が投影した刀剣達を消し、女性に向き直った。

「八神優の能力の話か？　そもそも俺の言いつけを破って手を出したのはお前だ、オータム。俺に当たるのはおかしいんじゃないか？　ＩＳを展開していなければ、お前は間違いなく死んでいただろう。そんな大きな実力差すら測れないお前が悪い。　まぁ、強いて質問に答えるとすれば、言ったところでお前は自分の目で見るまで信じなかっただろうからな」

言いきるや否や、オータムと呼ばれた女性から視線を外し、今度はこちらにその青い眼を向ける。
よし、コイツのあだ名はブルーアイズ〇ワイトドラゴンにしよう。
むしろ社長の嫁か？　いやむしろ社長でいいか。

「それにしても、俺がちょっとドイツ軍とお喋りをしている間に随分と暴れたみたいだな。悪いが組織としては、お前を見過ごすわけにはいかない。と言っても、オータムは既に戦闘不能だ。ＩＳを壊

されても困るしな。よって、ここからは俺が相手になろう」

しかしそう言う社長の表情には、全く別の思惑が如実に表れていた。俺の観察眼が正しければ、恐らくヤツは組織などではなく、単純に己のために俺と闘いたがっている。

理由は定かではないが、俺が社長に感じている嫌悪感や惹き合う感覚とも関係があるのだろうか。

――まぁ、そんな事は今は置いておこう。

重要なのは、ヤツは俺のせいで発生したイレギュラーであり、今後ストーリーに影響を及ぼしかねないということ。さらに言えば、下手をすればこの男に他のキャラまで殺されかねない。何せ魔術なんて物を使う得体の知れない男だからな。もしそうなれば、そいつらが死んだのは俺のせいという事になる。それだけは避けなければならない。

昔とは違うのだから。かつての山田幸助は死んだのだから。決して同じ結果を出してはならない。

とまぁ結局のところ、俺……いや、本来の山田幸助は、どうやらあの男の存在を容認できないらしい。

ならば、もはや闘わない理由は無い。

「奇遇だな。こちらとしても、お前の様な異端を放置するわけにはいかない。聞きたいことはいくつかあるが、消えて貰おう」

言い終えるや否や、俺は弾丸の如く飛び出し、先程オータムに向ける筈だった石斧を振るう。ちなみにこの石斧は、ヘラクレスが使った物をランスロットの能力で宝具化している。

敵は魔術を使うのだ。ならば、詠唱の間も無い程に攻め尽くす！

大気を押しのけ、横に一閃。その一閃は当たれば砕き、躱せば切り裂く二重の一太刀。

しかしエイトは、俺の手の中の物と全く同じ物をその手に出現さる。

直後、無骨な岩同士が激突する。その剣戟は雷鳴や地響きにも似た轟音を撒き散らし、相殺しきれず、行き場を無くしたエネルギーが暴風となる。

俺はその腕に確かな反動を感じながら、ひどく釈然としない思いを抱く。

俺には見えていたのだ。いや、分かっていた。

ヤツが俺の一振りを受け止めようと動く前に、既に俺はこの攻撃が止められることが分かっていた。

俺は思考を切り替え、次いで上段から振り下ろす。ヤツの存在を否定すべく、迅く、強く振り下ろす。しかしこれもまた止められる。

また止められると分かっていた。

おかしい、何かがおかしい。

俺は一度体勢を立て直すべく、後方へ跳躍する。しかしこれを機に思ったのか、あの男はここぞとばかりに距離を詰めてきた。

ヤツは反撃に転じようと、高速で石斧を振るった。

先程の俺と同じ横薙ぎ。ヤツの剣筋は手に取るように分かった。俺は石斧を使っていなし、ヤツに直接拳を叩きこもうとすると、今度

はこちらの拳の軌道が分かっているかのようにあっさり避けられる。
……一体何が起きている？
互いに互いの手の内が分かるという奇妙な状況に、俺は底しれぬ不安感を抱いていた。
このまま実力が拮抗したままだと、長期戦になった時、先に戦闘を始めていた俺が不利だ。
それに、実力が拮抗していること自体がおかしい。
こちらが振るうのは英雄の力。神話の再現。並の人間が太刀打ちできるはずが無いのだ。
にもかかわらず、俺と同じ物を投影し、あまつさえ互角に打ち合ってみせるという芸当をやってのけたこの男は一体……。
そうは思いながらも、攻撃の手は休めない。敵が振るえばこちらが受け、こちらが振るえば相手が受ける。しかし互いに決定打は与えられない。
相手も同じ状況の筈なのに、目の前の男は特に動揺した素振りはなかった。まるで初めから分かっていたかのようだ。
とここで、彼は落胆した調子で告げた。
「ふぅ、どうやら買い被り過ぎていたようだ」
その直後、突如としてヤツのスピードが上昇した。
「はっ、くっ……！」
思わず声が漏れる。先程とは打って変わり、今は明らかにヤツの優勢。俺は剣戟のすさまじさに押され、防戦を強いられる。

このままでは……負ける……っ！

俺は一か八か賭けに出た。この展開が読まれていれば失敗。読まれていなければ勝てる。

ヤツの連撃を防御しつつ、背後に王の財宝を展開する。選り好みなどしている暇は無い。俺は蔵の中の宝物を片っ端から射出した。

エイトはやや目を見開いたが、すぐに冷静に対処する。しかし、そこに一瞬の隙が出来る。

今度こそ――――決める！

「射殺す百頭（ナインライブズ）！」

ギリシャの大英雄ヘラクレスが完成させた流派『射殺す百頭』のうちの１つ。対人用ハイスピード９連撃。

しかし俺がこの時抱いたのは勝利の確信ではなく、不安が首を擡げるの感触だった。

それを証明するかのように、俺が目にしたのは、アイアスを展開しながら俺と同じ構えを取るヤツの姿だった。

そして激突。

一際強い衝撃が腕に伝わる。だがどうせ傷付くのは八神優の身体だ。ならば関係無い。動け。振るえ。ただヤツを消す為に。

しかし、どうやら武器の方はそうはいかなかったようだ。中央に大きな罅が入り、幻想の維持が不可能になる。

「くそッ！」

俺はすぐに新たな武器を手に取り出そうとするが、対する目の前の男は、攻撃の手を止めていた。まるでこれ以上は不要だとでも言うように。

そして、ヤツは投影した石斧を消し、淡々と言葉を紡いだ。

「軽い、軽すぎる。お前自身はあまりにも空虚だ。借り物の身体に、借り物の思考に、借り物の技能。お前はどうせ全てそう思っているんだろう。何１つとして自身の物ではないと。だからそんなに弱いんだよ、お前は」

……こいつは何を言っている？

「借り物？　空虚？　何の話だ？」

何故こいつは知っている？

「では聞くが、お前はそもそも何故ここにいる？　いや、お前がこの世界にいる意義とは何だ？　何故この世界にいる？」

理由？　意義？　それは……

「お前が今語ろうとした事は、本当にお前の物なのか？」

「……ッ！」

俺の物？　いや、違う。俺が今語ろうとした物は”俺”というキャラクターが持った目的。本当の俺の目的など存在しない。

「お前は何故俺と闘った？」

なぜ？

「それは……お前が一夏（アイツ）や、他の人達に危害を……」

「それも、本当にお前が抱いた理由か？」

どういう事だ？　そもそも、コイツの言う”お前”とは俺の事を言っているのか？　いや、違うだろう。コイツはどういうわけか、”本来の山田幸助”を知っている。

「確かにそういう理由もあったんだろう。だが、本当にそれが一番の理由なのか？　俺が魔術を使ったから、俺がお前の知らないイレギュラーだから警戒したか？　たったそれだけで、俺があのガキを殺すと結論付けたのか？」

「お前、どこまで……」

「なんでも知っている。何なら教えてやろう。お前は俺に言いようの無い嫌悪感の様なものを持った筈だ」

ああそうだ。俺はお前が許せない。お前の存在が許せない。だが、何故だ？　わからない。知りたくもない。

「でもその感情の出所がわからない。そうだろ？　だがそれこそが、お前が今闘っていた最大の理由だ」

「なぜそう言い切れる」

いや、分かっている。ヤツの言う事は正しい。

「お前も分かっているんだろう？」

ああ、分かっている。

「つまりお前は、お前自身の目的ではなく、他人が作り上げた目的を借り、八神優という入れ物を借り、他人の持つ能力も借りて、この世界で今やっていたことといえば、理由も分からない鬱憤晴らし。そこにお前と言う者はいない、行動に中身が伴わない。これを空虚と呼ばずになんと呼べと？」

ああ、そうだな。

「それから、いい加減にしろよ。俺が今話しかけているのはお前が作ったキャラクターじゃない。お前自身だ。作り物はすっこんでろ」

ｓｉｄｅ：エイト

突如、八神優……いや、山田幸助の雰囲気が豹変した。と同時に、虚ろに淀んだ瞳が俺を捉える。

「ふん、やっとお出ましか」

しかしヤツは俺の言葉に応える気配は無い。代わりにあるのは、明確な敵意。

次の瞬間、俺達は双剣を手に、再び切り結んでいた。

だが――

「やはり、軽い。諦めろ、お前では俺に勝つことは出来ない」

ヤツを突き動かしているのは、理由も分からないふわふわした嫌悪感だけだ。

これならば、まだ先程のキャラクターの方がマシだ。

俺はヤツの手に持つ双剣を上空へと蹴りあげ、俺自身は後方へ移動し、距離を取る。

これ以上は本当に無駄だ。あんな中身の無い相手を倒したところで意味など無い。早々に切り上げるか。

「今日の手土産にいいものを見せてやろう」

俺はポケットに入った小さい十字架を握りしめ、呼びかける。

そして光と共に展開されるＩＳ。

黒を基調とし、所々に白いラインが細く入っており、
手足や胴体部分など、全体的に装甲が細く、どこか冷たい印象を与える。

「完成したばかりで今初めて動かす機体だったが、上手く行ったか」

俺はＩＳがきちんと展開されている事を確認すると、そのまま瞬時加速を行い、ヤツへと肉薄する。
当然向こうは迎撃を行ってくる。ヤツの手には蹴り飛ばした双剣と同じ物が握られている。
俺は剣を振るう腕を強引に掴み、多少ダメージを受けながら地面へ叩きつけた。
コンクリートが砕けるが、それでもなおヤツは反撃を諦めていなかった。その手に持つ双剣を俺の顔めがけて投げつけるが、その程度の悪あがきが俺に当たる筈も無い。

俺は地面に横たわるヤツの胸に、ＩＳの装甲を纏ったまま腕を突き刺した。

当然胸からは紅の血が溢れてくる。だがそんなことはどうでもいい。
俺は新蔵を探り当て、強く握り、動きを止める。

「さて、お前にプレゼントだ」

俺はそのまま、ＩＳを解除した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

11（後書き）

我ながら意味が分からない。深夜テンションって怖いなー。2日ぐらい（あれ？3日？）寝てないなー。ところで腹減ったなー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5074z/

FateでIS

2011年12月29日07時49分発行